

調査員のコラム

「けんかだよお〜！」

子どもの権利調査員 西村 正

(在籍期間：H26.3～H29.3)

ある小学校でのこと。

5月初めに、体育館で全校朝会がありました。入学したばかりのかわいい1年生も、上級学年の児童とともに、たて一列に並び、まもなく始まろうとするところ。1年生の列でなにやらざわめきがおきています。

まもなく、「先生、けんかだよお〜」の声。

先生が駆け寄ってみると、男子A君とB君が互いに拳を振り上げて興奮しています。そこはとりあえずとりなし、朝会が終わってから2人にゆっくり話を聞くことにしました。すると、こんなことです。朝会に先立ち、みんなでたて一列に並んでいたところ、

A君いわく「並んでいたらね、Bくんが後ろから叩いてきたの。」

先生がB君に「えっ、Bくん、叩いちゃったの？」

B君いわく「いや叩いてなんかいないよ。A君の体が揺れてたから、ほく注意したんだ。」

先生「どうやって？」

B君「A君のここをこうやって・・・」（肩口をつかんでエイッと??）

周りの子に聞いても、B君が叩いたとは見ていないようです。

B君は、約束やルールを几帳面に守ろうとするまじめ人間です。

A君は、堅苦しいことは苦手で、どちらかというとりラックスしている子です。

どうやら、今回の出来事は、生真面目なB君がA君の身体の揺れが気になり、直してあげようと少々力の入った手でエイッとばかりにやってしまったこと。それを“叩かれた（痛い）”と受け取ったA君の誤解（?）から起きたトラブルのようでした。

学校で過ごす子どもたちの気性や性格は一人ひとり違います。そして、学校生活では、どの子も元気に育とうと一生懸命です。ただ、コミュニケーションはまだぎこちないところがありますので、ちょっとした出来事で、どちらも間違っていない、悪気もないのに、いがみ合いとなり、果ては喧嘩にまで発展してしまうことがあるのです。

今回の出来事も、A君が悪かったのか、それともB君の注意の仕方が悪かったのかと問えば微妙なところがあります。このような関係は、直接見ていないとわからない場合が多いですし、とって、大人が子どもたちの動きのすべてを見届けられるわけでもありません。

私たちにできるのは、子どもたちの生活をできるだけ見つつも、子ども同士のトラブルに際しては双方の言い分をよく聞き、どちらが〇か×かの判定を急がず、こんな時どう解決すればよいかについて話し合い、助言をしていくことではないかと思えます。それが、子どもたちにとって、社会性の培いや自立につながっていくのだらうと思えます。

相談員のコラム

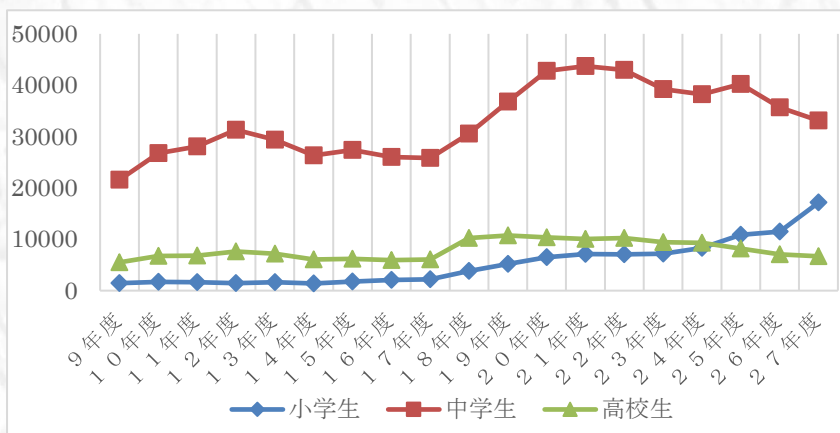
「『学級崩壊』の相談が急増」

子どもの権利相談員 競 和之

(在籍期間：H26.4～H29.3)

今、学級崩壊の相談が増えています。その事例の多くは相談活動では収まりきらず、子どもアシストセンターの調査員が学校に出向いて改善の方向性を探る「調整活動」へと発展することになります。一度崩壊すると立て直すには相当の時間と労力を要することになります。その間、子どもも親も辛い思いを余儀なくされるし、学校自体も疲弊していきます。

その背景には、非行の低年齢化があると考えられます。



毎年公表される「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において文部科学省に提出された暴力行為発生件数の推移を見ると、この20年間の小学生の暴力事故は、2,000件前後であったものが、18年度から徐々に増え始め、25年度には10,000件を突破し高校事例より多くなっています。その傾向は

止まらず、27年度には17,000件を超え、高校事例の3倍に近づいています。

同様の傾向は「道警 少年非行の現況」からも読み取れます。少年刑法犯の検挙補導状況に占める小学生の割合が、この10年間で3%から17%まで増え、その傾向に歯止めがかからない状態です。

小学校における初発型非行防止の取り組みが急務であると思われます。小学生の補導原因のほとんどが万引きや自転車盗みであるからです。また、小中連携が様々な形で行われている中で、生徒指導に特化した日常的な連携も重要と考えます。

他に考えられる背景としては、小学校の閉鎖的な学級状況（学級王国に陥りやすい）こと、親や子どもの変化（「謝れない子」や「許せない親」の増加 など）、発達障害を持つ子への対応のまずさ等、いろいろと考えられます。

【相談活動から見る崩壊した学級の様子】

- * 複数の子どもによるいじめ、嫌がらせ
- * クラスの喧騒状態・立ち歩き・私語・暴言・暴力等
- * 教師の指導に従えず、教師をバカにする言動
- * 学校への行き渋りや、朝お腹が痛くなるなどの身体状況
- * 授業が進まないことへの不安やストレス
- * 教師や学校への不信感

などがどの事例にも見られます。

前述しましたが、一旦崩壊すると立て直すには時間がかかります。その間に学校と保護者が対立関係になるケースが多くなります。両者の対立は、立て直しに時間がかかるばかりでいいことは何にもなりません。子どもアシストセンターがその間に立ち、両者が向き合って話し合う環境をつくる手伝いができればいいと考えています。

「最高のご褒美Ⅱ」

子どもの権利相談員 佐藤 加代子

(在籍期間：H27.4～)

私事ですが、マラソンを始めて7年が経過しました。フルマラソンを完走するためには、足腰にそれなりの筋肉が必要とされ、早朝のトレーニングが日課となっています。

自宅付近の公園からスタートし、走行距離によってコースを決めては、季節ごとの香りや町並みの移ろいを感じつつ、走ることに楽しみを感じています。

「春」には雪解けの道端で、草木が芽を出す姿に生きる力を感じます。

「夏」には一斉に咲き誇る草花の、心地よい香りや美しい彩りに心が和みます。

「秋」には澄み切った青空に、遠くまで見渡せる山々の雄大さに感動します。

「冬」には夜明け前の静けさと凜とした空気に、気持ちが引き締まります。

そして、通り抜ける住宅街では、庭先の植え替えやリフォームされた家々。商店街では店舗の入れ替わりや掲げられているポスターの張替えまでも、日々の変化に気づきます。

それは、毎日眺めているからこそその気づきであり、中々興味深いものです。

また、同じ時間帯に出会う新聞配達の方や散歩する住民との交流もできるようになりました。お互いに交わす挨拶ができないときは、身を案じてくれる方もおり、優しい心遣いに感謝の気持ちが溢れます。

そんな何気ない毎日のトレーニングから、こんなにもたくさんの感情を受け取ることができるのは、マラソンを続けている自分への「ご褒美」なのだと感じる、今日このごろです。

さて、アシストセンターに寄せられる相談では、親御さんからの相談も多くあります。「子どもの気持ちがわからない」「何を考えているのだろうか」「どうして、こうなったのだろうか」「悩んでいることを知らなかった」等々。物事が深刻になって、初めて気づく親御さんもいます。

親子が揃い食事や団欒等、共用の時間を過ごしていると、自然にお互いが理解できるようになるのですが、いつしか、日常的に繰り返す時間の経過や忙しさから、お互いの変化に気づかず、見逃してしまうこともあるのではないのでしょうか？

子どもたちは、身体だけではなく心も日々成長しています。言葉遣い、顔色や表情、時には服装や持ち物等にも気を配り、普段から「良く見て、聞いてあげること」で、いち早く変化に気づくことができることもあります。

日ごろの何気ない日常生活の繰り返しであっても、家族同士のコミュニケーションを絶やさないことで「子どもたちが健やかに育つ」としたら、それが、子を持つ親への“最高のご褒美”になるのではないのでしょうか・・・。

相談員のコラム

「一粒のライ麦」

子どもの権利相談員 富田 かなえ

(在籍期間：H27.4～)

「毎日忙しい」などと愚痴を言いながらも、テレビを見てゴロゴロするのが好きな己のなまけ心にムチを打ち、「そうだ。今日は庭に伸び放題の草取りをしよう。」と思い立ちました。以前は実家の父が草取りに来てくれていましたが、父亡き後、初めての初夏を迎えようとしているときでした。我が家のニャンコの額ほどの庭は、「ドクダミ畑」と化していました。

軍手をはめ、一本目のドクダミに挑戦。力任せに引っ張ったためか、茎の途中でちぎれてしまいました。「根からとらなくてはだめだよ。」という父の声を思い出し、次はそっと掘り起こし、根をたどっていきました。が、たどっても、たどっても根の先がいったいどこなのか……。結局、根も途中で切ってしまいました。しかも、その根は四方八方に伸びており、一本のドクダミのすべてを取り除くのは、到底無理であると思い知りました。

ある本で読んだことですが、アメリカの大学で、次のような実験が行われたそうです。

『木で作った箱の中に土を入れ、そこに一粒のライ麦をまいた。水を与えながら、数十日間それを育てると、貧弱な一本の麦の苗が育った。その後で箱を壊し、土を振り落とし、細いライ麦が育つために、いったいどのくらいの根を土の中に広げるかを計測した。』

目に見える根はすべてその長さを測り、目で確認しづらいような根毛も細かく計算したそうです。麦が育つために必要とする生命の営みを、数字で表す試みを行ったのです。結果、木の箱の中のライ麦の根の総延長の長さは、なんと11,200キロメートルに達していたということです。一本のライ麦が、思わず踏み潰されかねない、微かな命を支えるために、目に見えない土の中に膨大な長さの根を張り、そこから水分や養分を懸命に吸い上げ、成長していくことを想うとき、この世に存在することがどれだけ素晴らしいことかに思い至ります。

子どもたちが、生を受けた瞬間から見えない根を張り巡らせ、風に吹かれても倒れない青々とした生命を輝かせるために、家庭で学校で社会で、その根っこに栄養を与えなくてはなりません。たくさん学びを得て、陽の方を向いて生きていくために命があるのだと、あらためて心に刻みたいと思います。と同時に、子どもたちには、11,200キロメートルにも匹敵する生命力が宿っているはずで、その力を信じ、「陽の光と暖かさ」のような愛情で包んでいくことが、子どもたち一人ひとりを支え、応援していくことになるのだと考えています。

さて、私はというと、ドクダミの生命力に恐れをなして「草取り」を断念しました。夏が近づき、我が家の庭はドクダミの白い花で埋まり、それはそれで、かえって良かったのではと思わせる美しさではありましたが。